



01



02



03

01. 南東からの外観

02. 縁側。角部分に柱を置かないことで広がりを感じさせる。すりガラスは深い軒の裏側を見えなくする機能がある

03. 居室から食事室を見る。室内の至る箇所に円弧のデザインが見られる

聴竹居

住み心地を追求し細部までこだわり抜いた実験住宅の集大成

▶ 「環境共生住宅」の原点

自然豊かな天王山の麓、京都の大山崎に佇む聴竹居は、建築家・藤井厚二が環境工学の側面に意を注ぎつつ設計した住宅であり、1928年に完成した。藤井は自邸を実験住宅として建設し自ら住むことを通して改良を重ねた。聴竹居はその五回目、最後の自邸である。日本の気候、風土を生かしつつ、和風に西洋的な意匠、空間を融合させている。照明や造り付けの家具は全て藤井自身が設計しており、細部にまでこだわりと工夫がみられる。

▶ 徹底的なパッシブデザイン

各室は居室を中心に構成されており、居室から連続する畳間の床下には、外からの風を取り入れる導気筒（クールキューブ）が設置されていて夏期の室温を下げる役割

を果たす。取り入れた空気は縁側と調理室の天井に設けられた排気口へと導かれ屋根裏へ抜け、妻面の通風窓から排気される。部屋の間仕切り上部に設けた欄間は障子になっており、必要に応じて開閉することによって新鮮な空気が建物全体を循環し快適な住空間が保たれる。

▶ 計算された耐震設計

伊勢神宮の宮大工によって施工された聴竹居は構造的にも工夫がなされている。土台は耐震性のためコンクリートで固め、耐風にも考慮して平屋建てとなった。東南端に位置する縁側の屋根には寺社建築で使われる枯木（はねぎ）という工法を用い、桁を支点にしてテコを使って軒先をはねあげ、それにより柱のない水平連続窓を実現している。建設当時は、縁側

から桂川、宇治川、木津川の三川が合流して淀川になる雄大な景観が一望できた。

縁側の周りには落葉樹の高木、常緑樹の低木が植えられており、夏の強い直射日光を避け、冬の日射熱を取り込むサンルームとしても機能する。屋根には銅板葺きと、瓦葺の両方が使い分けられており、太陽高度を計算し、勾配と軒や庇の出の長さを変えている。

住所：京都府乙訓郡大山崎町大山崎谷田31
建築設計：藤井厚二
施工：酒徳金之助（大工棟梁）
竣工：1928年（本屋・閑室）
構造種別：木造